

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 時間從屬節に関する一考察—「トドウジニ」の意味・用法を中心に—

關於時間從屬句的考察之一—以「Todouzini」的意思・用法為中心—
| One of the investigations regarding time subordinate clause: focusing
on the meaning and usage of "Todouzini"

doi:10.30379/CJJS.200601_(3).0006

政大日本研究, 3號, 2006

作者/Author: 江雯薰(Wen-shun Chiang)

頁數/Page: 113-137

出版日期/Publication Date: 2006/01

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

[http://dx.doi.org/10.30379/CJJS.200601_\(3\).0006](http://dx.doi.org/10.30379/CJJS.200601_(3).0006)



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼 (Digital Object Identifier, DOI) 的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



關於時間從屬句的考察之一 ——以「Todouzini」的意思・用法為中心——

江雯薰*

摘要

「Todouzini」是由複數的詞，也就是「to」「douzi」「ni」所結合而成的詞組，與接續助詞有著相同機能的形式。本稿的目的在於具體地考察，「Todouzini」中有什麼樣的用法，並且如何地捕捉在這些用法中所表的共通意思。另外，「Todouzini」所持有的統語上的特徵・限制和「Todouzini」所表的意思有著如何的關連也在考察範圍內。

考察的結果如下列所示。

首先，從文法化的觀點來看，「Todouzini」是由「to」「douzi」「ni」所構成的複合接續助詞。其中的「Douzi」本身所持有的名詞性稀薄化，使「Todouzini」留有「Douzi」所表的名詞性進而轉移成接續助詞的形式。

還有，就時間的觀點來看，「Todouzini」有表時間的場合和不表時間的場合兩種。其中，在表時間的場合中，前文和後文是否為同時關係是由動作主體是否相同等來決定。還有，表同時關係的場合，決定後文和前文的哪個部分同時的因素為後文和補語。

關鍵詞：「Todouzini」，時間從屬句，同時關係，接續助詞化，界限點

*淡江大學日本語文學系助理教授
2005.8.31 到稿，2005.11.15 通過刊登

時間従属節に関する一考察 —「トドウジニ」の意味・用法を中心に—

江雯薰*

要旨

「トドウジニ」は、複数の語、つまり「ト」「ドウジ」「ニ」が結合して連語になり、接続助詞と同じような働きを持つようになった形式である。本稿では、「トドウジニ」が表している用法にはどのようなものがあるか、またそれらに共通する「トドウジニ」の意味はどのように捉えたらいいのか、そして、「トドウジニ」が持つ統語的な特徴・制約が、「トドウジニ」の意味とどのように関わるのか、を具体的に見ていく。考察した結果、次の通りである。

まず文法化を見ると、「トドウジニ」は「ト」「ドウジ」「ニ」によって構成された複合接続助詞であり、「ドウジ」の持っている名詞性が希薄になり、そして名詞性を残したまま、接続助詞に移行している形式である、と言える。

また、時間の観点から見ると、「トドウジニ」には、時間から解放されていない場合と解放されている場合がある。そのうち、前者の場合は、前件と後件が同時関係であるかどうかは、主体の異同などによって決まる。また、同時関係を表す場合は、後件が前件のどの部分と同時であるかを定める要因は、後件や補語であることも明らかになった。

キーワード：「トドウジニ」、時間従属節、同時関係、接続助詞化、
限界点

* 淡江大学日本語学科助理教授

One of the investigations regarding time subordinate clause: focusing on the meaning and usage of “Todouzini”

Wen-shun Chiang*

Abstract

“Todouzini,” composed by “to,” “douzi” and “ni,” is a set of phrase, which contains a similar feature as connective helping word. The purpose of this paper is to explore specifically how to use “Todouzini” and how to catch a common meaning among its various usages. Beside, the relationship between the function and limitation of “Todouzini” and its meaning is also included in this investigation. The result shows as the following: First, from the aspect of grammar, “Todouzini” is a compound connective helping word composed of “to,” “douzi” and “ni.” “Douzi” itself is a noun that its property gradually diminishes which makes todouzini keep the form of douzi, which a noun is transformed into a connective helping word. In addition, from the time point of view, todouzini demonstrates two sorts of occasion: one is to present time and the other is not to present time. On the occasion that presents time, whether the context is a simultaneous relationship is determined by either the action object is the same or equal. Furthermore, in the situation that shows a simultaneous relationship, the decisive factor which part in the context happen at the same time is the later text and the complement.

Key word: 「Todouzini」, time coordinate sentence, simultaneous relationship, connective helping word, a dividing point

*The department of Japanese Tamkang University, Assistant Professor

時間従属節に関する一考察 —「トドウジニ」の意味・用法を中心に—

江雯薰

1. はじめに

現代日本語においては、「トドウジニ」は時間を表す従属節の一つとして用いられている形式である。この形式は、次のように用いられている。

- (1) 発会と同時に吟子は進んでこの会に参加し風俗部長の要職についた。(花埋み)
- (2) 川ちゃんが倒されるのと同時に、ぼくたちが三人組をとりかこむ、という恰好になった。(新橋)
- (3) ガリバーがステージから消えると同時に、療平の隣にいた女も席を立った。(青)

(1)は名詞が前接して、「発会と同時に」の全体が副詞句として用いられているものである。このように、名詞が前接することができる場合¹は、{[名詞]+トドウジニ}という形で用いられている。また、(2)のように、「の」が「川ちゃんが倒される」に付いて名詞句になった形で「トドウジニ」に前接する場合もある。この場合は、{[動詞句+の]+トドウジニ}という形で、全体が副詞句として用いられている。

それに対して、(3)は動詞が前接して、「ガリバーがステージから

¹ その名詞は、次の(1)(2)の、「開戦、着艦」などのような動的意味を持つものが普通である。

- (1) アメリカが開戦と同時に、少しでも日本の国情を知っているものをかり集め、日本語教育に力を入れ始めたのと事がちょうど反対である。
(五十六)
- (2) 舷側につくと、艦上の軍楽隊の演奏で「君が代」が吹奏され、着艦と同時に武蔵檣頭に天皇旗がひるがえった。(戦艦)

消える」の全体が従属節となっている例である。この場合は、「トドウジニ」が接続助詞的に用いられている。

(1)～(3)を見ると、「トドウジニ」に、名詞や名詞句が前接するにせよ、動詞が前接するにせよ、それに後続する文との間には時間関係があると思われる。それは、(3)の「ガリバーがステージから消える」ことと、「療平の隣にいた女も席を立った」ことは同時に起きた出来事である、ということを見ればわかることである。

しかし、「トドウジニ」には、次の(4)のような場合もある。

(4) 「蘭方にも漢方にも長所があると同時に欠点があります。」
(華岡)

(4)では、「長所がある」と「欠点があります」は、ともに「蘭方」と「漢方」についての特徴を述べているものである。この場合は、時間関係を問わず、「トドウジニ」に前接する文(以下で「前件」と称する)と後続する文(以下で「後件」と称する)が同時に成り立っていることを表す。つまり、構文的に時間から解放されている。

このように見てくると、「トドウジニ」には、(1)～(3)のように時間から解放されていない場合と、(4)のように解放されている場合とがあると思われる。本稿では、時間から解放されていない場合と解放されている場合とに分け、「トドウジニ」の働きを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究とその問題点

「トドウジニ」についての先行研究は、管見に及ぶ限り、森山(1984)、森田・松木(1989)、グループ・ジャマシイ(1998)がある。

森山(1984)は、「トドウジニ」について、「「彼は家に着くと同時に電話をした」のように、同じ主体の場合、前件と後件が継起的な解釈である余地はある。それに対して、異なる主体である場合、「彼が着くと同時に彼女も着いた」のように、「彼と彼女は同時に着いた」と言い換えられるなら、同時的な意味しかない」としている。この記述は、時間から解放されていない場合を説明するものである

と思われる。

森田・松木(1989)では、「トドウジニ」について、「活用語の終止形を受け、「Aと同時にB」の形で一つの事物の両面性A B——時には正反対の性質を有する——を対比的に示す。ここでは時間的前後関係の意味における同時性は全く問題とされない。「一方で」等と言い換えることができる」としている。また、「順接的で添加を示す場合も見られる」ともしている。この説明は、時間から解放されている場合のみ述べるものであると思われる。

グループ・ジャマシイ(1998)は、「トドウジニ」について、「前のことがらの起った直後に次のことがらが起こることを表す」としている。また、「二つのことがらが同時に成立することを表す」とし、また「前後の意味内容によって、「累加」「対比」などの関係を表す」ともしている。この記述は、時間から解放されていない場合と時間から解放されている場合を述べるものである。

このように見てくると、時間から解放されていない場合は、森山(1984)では、主体の異同から前件と後件が同時的と継起的のどちらかを表すのに対して、グループ・ジャマシイ(1998)では、主体の異同を問わず、前件と後件が継起関係を表すとしている、ということが言える。ただ、同時的に解釈できる場合は、後件の事態が前件の事態のどの部分と同時であるかについては、論じられていない。次の(5)(6)がその例である。

(5) 水溜りを飛ぶトドウジニ、体のバランスを崩した。

(6) 水溜りを飛ぶトドウジニ、足を滑らせた。

(5)では、後件の「体のバランスを崩した」は、水溜りを飛びあがって着地する寸前の時と同時である。それに対して、(6)では、後件の「足を滑らせた」は、水溜りを飛び越えようと足を地面から離す時と同時である。このように、前件と後件の同時関係、つまり後件が前件のどの部分と同時であるかは、アスペクトの観点から考えると、差異が生じてくる。その差異はどのような要素によって生じたのか。それについて、4. 1で考察する。

それに対して、時間から解放されている場合は、森田・松木(1989)でもグループ・ジャマシイ(1998)でも、前件と後件の意味内容から「累加」「対比」などの関係を表す、と考察してきたものである。だが、時間から解放されていない場合は、前件と後件が「累加」「対比」などの関係を表すことも可能である。たとえば、次の(7)は「累加」を表す例であり、(8)は「対比」を表す例である。

(7) 彼が外出するトドウジニ、彼女も外出した。

(8) 太陽が沈むトドウジニ、月が昇る。

このように見てくると、「累加」「対比」は時間から解放されている場合だけの特徴ではないと思われる。つまり、前件と後件の意味内容から見た特徴は、「トドウジニ」自体が持っているものではない。このことから、前件と後件に現れた述語にどんな特徴があるかを考察する必要がある。たとえば、

(9) 乗り物酔いは、精神的なものが深くかかわっていると同時に、胃腸の調子が悪い、睡眠不足、疲労など体調不良のときにも酔いやすくなります。

(http://www.threelight.co.jp/kurakura/health/health_data/tubo/tubo02-4k)

(9)では、前件の「かかわっている」と後件の「酔いやすくなります」はともに「乗り物酔い」の特徴として述べられている。この場合は、(9)のように、動詞で示されたほかに、どのような特徴があるのだろうか。それについて、5で考察する。

本稿では、このように多様な用法を持っている「トドウジニ」の「時間から解放されていない場合」に関する考察においては、接続助詞的に用いられる(3)の用法を対象とし、その接続助詞化や前件と後件について構文的・意味的に考察する。また、「時間から解放されている場合」も取り扱い、考察した上で、「トドウジニ」の働きを明らかにする。

3. 「トドウジニ」の接続助詞化について

「トドウジニ」の接続助詞化については、まずどのような語で複合して構成されるかということと、構成要素だけで使うことができるか否かということ考察する。

「トドウジニ」には、「ドウジ」という名詞が含まれている。以下では、「ドウジ」に前接する「ト」と後続する「ニ」の必要性を考察する。

(10 a) 家に帰ったトドウジニ、電話が鳴った。

(10 b) 彼女はカレーライスを作っているトドウジニ、ケーキも作っていた。

(10 a)では、「家に帰った」と「電話が鳴る」ことは同じ時間に起こったとも、「家に帰ったらすぐに電話が鳴った」とも考えられる。この場合は、前件と後件の間にある時間関係は同時関係と継起関係の両方とも考えられる²。一方、(10 b)は、「彼女はカレーライスを作っている間、ケーキも作っていた」という意味を表す。この場合は、前件と後件の間は同時関係しか表さない。

(10 a)(10 b)のような例から、「ドウジ」「ニ」を取り除いて見ると、次の(11 a)(11 b)になる。

(11 a) 家に帰ると、電話が鳴った。

(11 b)*彼女はカレーライスを作っているト、ケーキも作っていた。

(11 a)は「家に帰ると、すぐに電話が鳴った。」ということの意味している。この場合、前件と後件の表す時間関係は、継起関係である。それに対して、(11 b)は非文となる。このように見てくると、「トドウジニ」の前件と後件は、同時関係と継起関係を表すことができるが、「ト」で表すと、継起関係しか表せない、ということが

² 前件と後件の時間関係は継起関係しかない場合もある。たとえば、「電気が止まるトドウジニ、発電機が動き出した」という例を見ると、「発電機が動き出したきっかけは、電気が止まったからだ」と思われる。この例から、前件の事態が後件の事態のきっかけとなる場合には、前件と後件は、継起関係を表すと言える。

言える。このことから、「ト」によって表す前件と後件の時間関係は、「トドウジニ」の一部に過ぎないということが言える。

また、「ト」「ドウジ」を取り除いてみると、次の(12 a)(12 b)のように、非文となる。

(12 a) *家に帰ったニ、電話が鳴った。

(12 b) *彼女はカレーライスを作っているニ、ケーキも作っていた。

それは、「家に帰った」「彼女はカレーライスを作っている」のような動詞句が、格助詞の「ニ」に前接することができないからである。

次に、(13 a)(13 b)のように、「ト」「ニ」を取り除いて、「ドウジ」のみ用いた文をみる。

(13 a) *家に帰ったドウジ、電話が鳴った。

(13 b) *彼女はカレーライスを作っているドウジ、ケーキも作っていた。

「ドウジ」は、漢字の「同時」で示されるように、「同じ時間」や「同じ時代」といった実質的意味を持つ名詞である。(13 a)では「家に帰った」が、(13 b)では「彼女はカレーライスを作っている」が「ドウジ」を修飾すると、非文となる。それは、「ドウジ」には比較されるものがないと、どのような基準で同時関係を表すかが不明になるからである。「ト」の介在によって、その基準、つまり比較されるものが明示される。このように見えてくると、「ドウジ」の語彙的意味に左右されているために、「ト」は「ドウジ」にとっては欠かせないものであると言える。

このように考えると、「ト」が「ドウジ」と複合して、一つの形式になっていると考えられるが、実際はそうではない。(14)がその例である。

(14) *家に帰ったトドウジ、電話が鳴った。

それは、「トドウジ」のみでは非文となり、接続助詞的な意味は生まれられないからである。具体的に言うと、「トドウジ」が接続助詞的な

用法を持っているわけではなく、「ニ」を伴うことによって、「トドウジニ」全体が接続助詞的に用いられることになる。

このように見てくると、「トドウジニ」は、名詞（「ドウジ」）が中心となって、格助詞（「ト」と「ニ」）が連合して一まとまりの形になる形式であると言える。また、(11)～(14)で示されているように、「ト」「ニ」「ドウジ」のいずれかを取り除いたら統語関係に変化が生じる，ということから、「トドウジニ」は形態的にも意味的にも {「ト」+「ドウジ」+「ニ」} という構成要素の合計だけでは説明できない形式であると言える。

4. 時間関係から解放されていない場合の「トドウジニ」

4.1. 前件における構文的な特徴

「トドウジニ」に前接するのは、静態動詞³でなく、運動動詞である。

(15) *彼女は、しっかりしているトドウジニ、親代わりに兄弟の面倒を見ている。

(16) *彼はすぐれているトドウジニ、国の代表に選ばれた。

(17) 加恵は単純に、緊張を解くと同時に胸を弾ませた。(華岡)

(18) 彼は終いに杵を臼のふちに振り降ろしたトドウジニ土間に倒れた。

(19) 料理を作っているトドウジニ、ラジオを聞いている。

(15)の「しっかりしている」と(16)の「すぐれている」のように、述語が動き・変化を伴わない静止状態を表す動詞は、「トドウジニ」に前接すると、非文となる。それに対して、(17)～(19)のように、動作・変化を表す動詞は「トドウジニ」に前接すると適格な文となる。このように見てくると、「トドウジニ」に前接する動詞には「運

³ このような動詞は、アスペクト的に完成相と継続相の対立を持たないものであり、工藤(1995)の静態動詞である。

動性」⁴が要求されると言える。

また、その前接する動詞の語形を見ると、(17)のような「スル」形、(18)のような「シタ」形、(19)のような「シテイル」形がある。ただし、(17)の「スル」形を次の(17')のように「シタ」形に、(18)の「シタ」形を、次の(18')のように「スル」形に置き換えることが可能な場合もある。

(17') 加恵は単純に、緊張を解いたと同時に胸を弾ませた。

(18') 彼は終いに杵を臼のふちに振り降ろすトドウジニ土間に倒れた。

この場合は、「スル」形にしても「シタ」形にしても、いずれも前件が完成した事態をまるごと受けていると言える。それに対して、(19)のように、「シテイル」形が前接する場合は、(19')のように「スル」形に置き換えて前接することも可能である。

(19') 料理を作るトドウジニ、ラジオを聞く。

この場合は、語彙的に継続性を持つ動詞を「スル」形で表し、前件は継続している事態として捉えられている。

このように見てくると、前件は完成的または継続的に捉えることができると言える。ただし、前件の述語が「スル」形と「シタ」形の両形で「完了」を表す場合、動作・変化のどの部分の「完了」を表すかは、不明であることがある。それについては、動詞の持っている特徴との関連を考えて以下で考察する。

⁴前件には「運動性」が要求されることは、次の(1)と(2)のように、前接できる名詞の特徴からも反映されている。

- (1) 全艦船は、出港と同時に、完全な無線封鎖を実施した。(五十六)
- (2) 関東大震災と同時に、全国の警察署がひどく神経質になって主義者狩りを始めたことを外山は知っていた。(孤高)

(1)の「出港」は「港を出る」、(2)の「関東大震災」は「関東大震災が起こる」という意味を表すことから、それぞれは動的意味が含まれている名詞であると言える。

A) 限界点を持たない動詞の場合

(20) ～回るトドウジニ，～。(20') ～回ったトドウジニ，～。

(20)の「回る」という動作のみを見ると、「回り始めると同時に」と解釈できる。それに対して、(20')の「回ったトドウジニ」は、「回り始めたと同時に」と「回り終わったと同時に」(動作全体の完了)の両方に解釈できる。このように、複数の局面が考えられる場合について、前件に現れる補語や後件の事態を考慮に入れると、次のようなことが見られる。

(21) トラックを二周回ったトドウジニ，その場に倒れた。(22) 二キロ回ったトドウジニ，足に痙攣がきだした。

(21)(22)では、「回る」という動作全体が完了であることを表している。この場合、(21)の「二周」、(22)の「二キロ」のように、全体量を表す補語を伴うことによって、動作全体の完了の解釈しかないことになる。また、

(23) 観光地を回ったトドウジニ，お小遣が底をついた。(24) 観覧車が回ったトドウジニ，赤ちゃんが泣き出した。

(23)は、「観光地を一通り楽しんだあげく、持っていたお小遣を使い果たした」という解釈ができる。この「回ったトドウジニ」は「回る」という動作の全体の完了を表す。(24)は「赤ちゃんは観覧車が動き出したことに怖がって、ついに泣き出した」という解釈ができる。この「回ったトドウジニ」は、「回り始めたと同時に」と解釈できる。

このように、動詞に限界点を持たない場合、「スル」形で表すと、動作の始まりの完了を指すのに対して、「シタ」形で表すと、動作の始まりの完了と動作全体の完了を表すことが可能であるが、後件の出来事や全体量を表す補語によって、最終的に局面が決まる。

B) 限界点を持つ動詞の場合

この場合は、複数の局面を持つ動詞と一つの局面しか持たない動詞に分けて考察する。

まず、複数の局面を持つ動詞をみる。

(25) ～作るトドウジニ、～。

(25') ～作ったトドウジニ、～。

(25)では、「作る」という動作のみをみると、「作り始まり」とも「作り終わり」とも解釈することができる。それに対して、(25')の「作った」という動作を見ると、「作り終わった」の意味であり「作る」という動作全体の完了の意味が強くなると思われる。つまり、「シタ」形で表すと、動作全体の完了を表す。

このように見てくると、「スル」形で表す場合は、複数の局面が考えられると言える。ただし、最終的にどの局面であるかは、補語や後件との関連を考え合わせる必要がある。たとえば、

(26) 彼女は 30人前の料理を作るトドウジニ、倒れた。

(26)では、「30人前」を入れずに「彼女は料理を作るトドウジニ、倒れた」になると、「彼女は料理を作り終えた時に、倒れた」とも、「彼女は料理を作っている最中に、病気か何かで倒れた」とも考えられる。「30人前」をつけると、「たくさんの料理を作ったことによる疲れで倒れた」という意味が取られ、「作り終えた」局面を表すことになる。このように見てくると、(26)の「30人前」のような全体量を表す補語を伴うことによって、「作り終わり」の局面の完了を表すことになる、と言える。また、

(27) 胎盤の蛋白質は再生細胞を作るトドウジニ、細胞分裂もし始める。

(28) 曲を作るトドウジニ、達成感が湧いてきた。

(27)では、後件の「細胞分裂も始める」によって、「作る」という動作の始まりの部分を指すことになる。(28)では、後件の「達成感が湧いてきた」によって、「作る」という動作の終わりの部分を指すことになる。このように見てくると、複数の局面が考えられる場合は、前件にくる全体量を表す補語や後件の事態が最終的な前件の局面を決定する要素となると言える。

次に、限界点を持つが、変化した一時点を表す動詞、または語義

そのものがある局面を特定する動詞の場合を見る。

(29) 1999年が2000年に変わるトドウジニ, 花火を打ち上げた。

(29') 1999年が2000年に変わったトドウジニ, 花火を打ち上げた。

(30) 電気が切れるトドウジニ, 自動発電機が動き出した。

(30') 電気が切れたトドウジニ, 自動発電機が動き出した。

(31) 演奏が終わるトドウジニ, 観客の歓声が聞こえた。

(31') 演奏が終わったトドウジニ, 観客の歓声が聞こえた。

この場合, 前件の述語を「スル」形にしても「シタ」形にしても, 同じ部分の動作の完了を表す。それは, 動詞が変化した一時点, またはある局面を特定することを表すからである。

以上のことをまとめてみると, 次のようになる。

「トドウジニ」の前件の述語が, 「スル」形または「シタ」形で「完了」のアスペクト的意味を表す場合は, 動詞の素性によって, 意味的に違いが生じてくる。「回る, 動く, 走る」のように, 限界点をもたない動詞の場合, 「スル」形は, 「始まり」の完了を表すのに対して, 「シタ」形では, 「始まり」の完了と動作全体の完了の両方が考えられる。一方, 「作る, 脱ぐ, 履く」のように, 限界点をもつ動詞の場合, 「スル」形は, 「始まり」の完了と「終わり」の完了の両方の解釈ができるが, 「シタ」形は動作全体の完了を表す。しかし, 動詞に限界点があってもなくても, 複数の局面を考えられる場合は, 全体量を表す補語, または後件の事態によって, 最終的に決まる場合もありうる。

また, 「変わる, 切れる, 終わる, 命じる」のように, 限界点を持つが, 変化の一時点あるいは特定される局面を表す動詞の場合, いずれも後件の事態に左右されず, 「スル」形でも「シタ」形でも同じ部分の完了を表す。

4. 2. 後件における構文的な特徴

後件における構文的な特徴については, アスペクトとモダリティ

の観点から考察を行う。

後件の述語が運動動詞である場合は、(32)(33)のような、「シタ」形、「スル」形や、(34)～(36)のような「シテイル」形で表すことができる。

(32) 種火を切るトドウジニ、元栓も切る。

(33) 刑事たちは、八名の者の家を徹底的に家宅捜査をすると同時に、あらためてかれらの身辺調査をやり直した。(戦艦)
 (32)のように述語を「スル」形で、(33)のように「シタ」形で表すことができることから、後件は完成的に捉えられている事態であると言える。

また、後件の述語が「シテイル」形の場合、(34)のように動作継続、(35)のように結果継続、(36)のように、パーフェクト性を表すことができる。

(34) 彼は山に登っているトドウジニ、自然も観察している。

(35) 町は雷が落ちたトドウジニ、停電になっている。

(36) もちろん、聡子も、松原が入ってくると同時にソファから立ち上がっていた。(虹に)

(34)では、後件の「自然も観察している」は継続的に捉えられている事態である⁵。(35)では、後件の「停電になっている」は「停電になったあとの状態で、停電から復旧していない状態」としても、「落雷を原因とした停電が継続している状態」としても解釈することができる⁶。この場合、「雷が落ちた」ことは点的な一瞬の出来事であるのに対し、「停電になっている」は線的な継続的事態である。そして、前件の「雷が落ちた」ことが起こった時点と同時であるのは「停電になった」ことが起こった時である。(36)では、後件の「ソファから立ち上がっていた」は「立ち上がった」という完成的な事態の

⁵ (34)の前件の「山に登っている」が習慣とも捉えられるので、後件も習慣の読みが可能である。ここでの「継続的」というのは、習慣的なものを指すのではない。

⁶ (35)は、ニュースでの記者のレポートとか、停電を体験している人が、状況を他の人に電話で報告するような場面を想定した文である。

効果が続いていた、という意味を表す。前件の「松原が入ってくる」ことと同時にあるのは、「ソファから立ち上がる」という動作が完了した、「ソファから立ち上がった」時である。この場合、「立ち上がる」という運動の完成性と、その効力の継続性の両方を捉えるものである。

このように見てくると、(34)～(36)の後件は継続的に捉えられる事態である、と言える。ただし、(35)(36)の場合、後件は変化した時点⁷が前件の起こった時点と同時にあり、その変化した後の状態を継続的に捉えられる事態である。詳しく言えば、「動作継続」の場合は、前件と後件のどちらも継続的に捉えられる事態であり、その同時性は、前件と後件が重なる線、つまり進行中の動作によって示されている。「結果継続」の場合は、前件は完成的、後件は継続的に捉えられる事態であり、その同時性は前件と後件が重なる点、つまり変化によって生じた状態で示されている。「パーフェクト」の場合は、前件は完成的、後件は継続的に捉えられる事態であり、その同時性は前件と後件が重なる点、つまり変化によって生じた事態の効力で示されている。

次に、後件の述語が「いる」「ある」のような状態を表す動詞である場合を見る。

(37) 今回の宝くじで一等賞に当たった人がいるトドウジニ、外れている人もいた。

(38) 台風16号で被害を受けたところがあるトドウジニ、被害を受けていないところもあった。

(37)(38)を見ると、後件の事態が継続的に捉えられている状態であると言える。

(32)～(38)から、後件は完成的、または継続的に捉えられる事態であると言える。

次に、後件が実現した事態であるかどうかをみる。

⁷ 「変化した時点」とは、変化の開始時点を指す。

(32)のように、「スル」形で実現されていない事態を表す場合もあり、(33)～(38)のように実現された事態を表す場合もある。このことは、後件のモダリティの制限からも反映されている。

(39) 開始のベルが鳴るトドウジニ、試験問題に取り掛ろう。

(40) スターが窓から顔を出すトドウジニ、一緒に手を振ろう。

(41) ピストルが鳴るトドウジニ、走り出しなさい。

(42) 信号が青に変わるトドウジニ、飛び出さな。

(39)～(42)では、話し手の意志・勧誘・命令・禁止などの表現は後件の述語と共起できる、ということから、いずれも実現されていない事態であると言える。

以上から、後件は完成的または継続的に捉えられる事態であり、また実現の事態か未実現の事態のどちらかを表すことができる、と言える。

4. 3. 前件と後件の関係

前件と後件の時間関係について、それぞれが継続的、または完成的に捉えられる事態であるかどうかの観点から考察すると、次のようになる。

A) 前件と後件が継続的に捉えられる事態である場合

(43) 当社は国内各地に、多くの一般廃棄物焼却施設を建設していると同時に、自社内を含む産業廃棄物焼却施設の建設も行っている。

(http://www.jfe-steel.co.jp/archives/nkk_giho/176/pdf/176_10.pdf)

(44) 中国の場合、その人口規模の大きさから地球環境問題に深くかかわっていると同時に、局所的、地域的環境問題もいぜんとして深刻な状況である。

(<http://washida.net/genko/china.html-26k>)

(43)では、「当社は国内各地に、多くの一般廃棄物焼却施設を建設している」と「自社内を含む産業廃棄物焼却施設の建設も行っている」

は、ともに「動作継続」として捉えられる事態である。(44)では、「中国の場合、その人口規模の大きさから地球環境問題に深くかかわっている」と「局所的、地域的環境問題もいぜんとして深刻な状況である」は「状態継続」として捉えられる事態である。(43)(44)を見てくると、前件と後件が「動作継続」、「状態継続」として捉えられる事態であると言える。つまり、いずれも前件と後件が継続的に捉えられている事態であることを表す。

B) 前件と後件が完成的に捉えられる事態である場合

(45) 信号が赤になるトドウジニ、急ブレーキを踏んだ。

(46) 太郎が走り出すトドウジニ、次郎も走り出した。

(45)では、「急ブレーキを踏むトドウジニ、信号が赤になった」と言い換えられる。(46)は、「太郎と次郎は同時に走り出した」ということを表す。この場合は、前件と後件の主体が入れ替えても文が成立できる。このように主体が異なる場合は、前件と後件が同時に起きる事態として捉えられることが可能である。それに対して、

(47) 彼はプールに飛び込んだトドウジニ、バランスを崩した。

(47)は、「彼はプールに飛び込んでからすぐに体のバランスを崩した」という意味を表す。二つの事態の時間関係を見ると、前件と後件は同じ主体によって、時間的に非常に近接して発生する事態であることが分かる。この場合は、前件が後件より早く起きたと解釈できる例である。つまり、話し手は継起的に捉えている。

このように見てくると、異主体の場合は、(45)(46)のように、前件と後件が同時的に捉えられる場合もあれば、(47)のように、継起的に捉えられる場合もある、ということが言える。つまり、前件と後件が同時的であるかどうかは、森山(1984)でも考察されたように、主体の異同にも関わっている。

次に、前件と後件がどのような同時関係を表すかを見る。

まず、前件と後件の述語が異なった語形で表す例から考察する。

(48) *彼女が事故で息を引き取ったトドウジニ、夫は商売の取り引きをしていた。

(49) *車が走っているトドウジニ，車の中の犬は吠え出した。

(48)は、「彼女が事故で息を引き取った時は，夫は商売の取り引きをしていた」という意味を表す例であるが，「トドウジニ」を用いることはできない。また，(49)は，「車が走り出した瞬間，車の中の犬が吠え出した」という意味を表すが，「車が走っている」を「車が走り出す」に置き換えると，適格な文になる。(48)(49)をみると，前件と後件は，述語の語形が異なっても，意味的に同じ完成的，または継続的に捉えられる事態でなければならない，と言える⁸。このことは，「トキ」の例と置き換えられるかどうかからも反映されている。次の(50)(51)がその例である。

(50) 札幌に出張する時，信夫は必ずふじ子の病床を見舞った。

(塩狩峠)

(51) 信長が河内の陣にいるとき，光秀の丹波攻略の計画は成った。(国盗り)

(50)は，「札幌に出張している間に，信夫は必ずふじ子の病床を見舞った」という意味を表す。(51)は，「信長が河内の陣にいる間に，光秀の丹波攻略の計画は成った」ということを意味している。(50)(51)のどちらも，後件の事態は前件が継続している間に起こった，といった同時関係を表す。この場合，「トキ」を「トドウジニ」に置き換えると，非文となる。このことから，「トキ」のように，「トドウジニ」と同じく同時関係を表す形式であっても，前件と後件の表す時間幅が一致しないと，「トドウジニ」に置き換えられない，と言える。

以上の考察より，前件と後件は共に完成的な事態あるいは，継続的な事態として捉えられなければならない，と言える。

5. 時間から解放されている場合の「トドウジニ」

⁸ (1)赤ん坊が生まれるトドウジニ，母親は危険な状態になっている。

(1)は，「赤ん坊が生まれた途端，母親は危険な状態になった」と解釈できる。後件は述語が継続相で表すが，意味的に見れば完成的に捉えられる事態である。

これまで時間関係を表す「トドウジニ」を見てきた。次に、時間から解放されている「トドウジニ」を考察する。

(52) 彼女は子供やお年寄りに優しいトドウジニ、動物にも優しい。

(53) 彼はハンサムであるトドウジニ、クラス委員としての責任感も強い。

(54) 武井大助は、山本の仲のいい友人であると同時に、歌の先生であった。(五十六)

(55) ビスケットは栄養的に優れていると同時に、味が比較的淡泊です。

(<http://www.biscuit.or.jp/lifestyle/healthy.html-16k>)

(52)の「子供やお年寄りに優しい」と「動物に優しい」は「彼女」の特徴であり、(53)の「ハンサムである」と「クラス委員としての責任感も強い」は「彼」の特徴である。また、(54)の「山本の仲のいい友人」と「歌の先生」は「武井大助」の身分である。そして、(55)の「栄養的に優れている」と「味が比較的淡泊」は、「ビスケット」の性質である。これらは、時間の推移とは関係のない例である。つまり、どの時点においても、常に真であることを表し、前件と後件は構文的に時間から解放されている。この場合、前件と後件における述語は形容詞的性格を持つのが普通である。その前接する述語の語形は、詳しく言えば、(52)のようにイ形容詞が来ると、終止形で前接する。(53)のようにナ形容詞や、(54)のように名詞が来ると、「{ナ形容詞/N}+である」の形で、(55)のように「静態動詞」が来ると、「スル」形または「シテイル」形で前接する。ただし、動詞が前接する場合は、必ずしも「静態動詞」とは限らない。それは、次の、動作・変化を表す動詞が前接する例を見ても明らかである。

(56) 地球は、自転しているトドウジニ、太陽の周りを回っている。

(57) 女性は、妊娠・出産という固有の母性機能を持っていると

同時に、次代を担う子どもを生み育てるという重要な社会的機能を担っています。

(http://www.city.nikko.tochigi.jp/_simin/kyoudou/josei/10.pdf)

- (58) フォーキンのもうひとつの代表作『レ・シルフィード』は別の意味で 20 世紀バレエの嚆矢の一つとなった。これは両面的なバレエで、ロマンティック・バレエへの郷愁にみちていると同時に、19 世紀にはありえなかったプロットレス・バレエのはしりとなった。

(<http://www.shosbar.com/works/dance-articles/aichidancefestival.html-7k>)

(56)(57)は、前件と後件が不変な事態であるという点で、恒常的なものを表していると言える例である。(56)では、「地球が、自転しているトドウジニ、太陽の周りを回っている」は、「地球は、自転していることと太陽の周りを回っていることが認知されていて、現在も未来もずっとこういう状態が続く」と思われることを表している。一見時間性があるように思われるが、過去から現在そして、未来へも続く、という恒常的な事態なので、前件と後件の全体が構文的に時間から解放されている。(57)では、「妊娠・出産という固有の母性機能を持っている」ことも、「次代を担う子どもを生み育てるという重要な社会的機能を担っています」ことも、「女性」として生まれつき持っている属性である。これらは、どの時点を取っても常に成り立つ属性である。(58)では、「これは両面的なバレエで、ロマンティック・バレエへの郷愁にみちている」はバレエの内容について述べるものであるが、「19 世紀にはありえなかったプロットレス・バレエのはしりとなった」は、バレエの位置付けについて述べるものである。この場合、前件と後件の間に生じた時間関係が希薄になって、「バレエ」の二つの側面を述べるようになった。

このように見てくると、ものごとの性質や属性や特徴を表す、つまり一般公理的な文の場合、「トドウジニ」における前件と後件が構

文的に時間から解放されているので、動作・変化を表す動詞が現れても、その動作・変化が表している運動性が希薄になり、アスペクトから解放されている、と言える。

6. 「トドウジニ」の働きについて

以上の考察より、「トドウジニ」は、「ト・ドウジ・ニ」の三語が合わさったものであり、このうち、「ドウジ」は名詞、「ト」と「ニ」は格助詞である、ということが明確になった。また、実質的意義が希薄になっている「ドウジ」が、きわめて形式化されていることによって、「トドウジニ」は、全体で一つの形式としての特有の表現価値を持っていると思われる。つまり、「トドウジニ」は、意味的にはきわめて形式化されたものであるし、「ドウジ」も名詞の実質的な意味が希薄になり、「ト+ドウジ+ニ」の結合が固定されているものである。

「トドウジニ」については、構文的、または意味的に考え合わせると、前件と後件が同時的に捉えられる事態であることを表す、という働きがある。具体的に言えば、次の(59)のように、時間から解放されていない場合もあり、(60)のように、時間から解放されている場合もある。

(59) 彼は職を失うトドウジニ、妻に逃げられた。

(60) 太郎は大学教師をしているトドウジニ、小説家もしている。

(59)では、前件の「彼は職を失う」ことと後件の「妻に逃げられる」ことは同時的に起きた事態であるが、前件と後件を互いに入れ替えることはできない。この場合、前件と後件の間に「累加」といった意味関係があると思われるが、それより前件と後件の持っている時間的な同時関係が強く現れている。それに対して、(60)では、主体の「太郎」にとっては、「大学教師をしている」ことと「小説家もしている」ことは同時に持っている身分である。そして、「太郎は小説家をしていると同時に大学教師もしている」のように、入れ替えることができる。この場合は、前件と後件の持っている時間的な同時

関係が希薄になっており、「累加」といった意味関係へ移行すると思われる。ただ、この場合でも(61)(前掲の(8))のように、前件と後件が「対比」といった意味関係を持つことも可能である。

(61) 太陽が沈むトドウジニ、月が昇る。

(61)では、「太陽が沈む」ことと、「月が昇る」ことは、対照的に行われている事態である。

(60)(61)のように、意味内容からみた「累加」「対比」などの関係を表す場合は、森田・松木(1989)でもグループ・ジャマシイ(1998)でも示されてきたものである。ただ、森田・松木(1989)とグループ・ジャマシイ(1998)では、時間性が希薄になっているとはせず、「時間的前後関係の意味における同時性は全く問題とされない」としている。

このように見てくると、「トドウジニ」によって結ばれた前件と後件は同時関係を表す、と言える。そして、その同時関係は、(59)のように「累加」の意味が含まれていても、動作、変化、一時的な状態を表すものを伴うことによって、時間性が強く現れる場合もあれば、(60)(61)のように、述語が恒常的な状態、性質などを表すものを伴うことによって、時間性が希薄になっており、「累加」「対比」などの関係へ移行していく場合もある。

7. まとめ

以上、「トドウジニ」の構文の特徴、意味・用法を考察してきた。考察してきたことから、「トドウジニ」には、前件と後件が同時に捉えられる事態であることを表す働きがある、ということが明確になった。具体的に言えば、「トドウジニ」を用いることによって、前件と後件が表す時間関係には同時関係と継起関係の両方がありうる。そのうち、前件と後件の主体が異なる場合と、前件が後件のきっかけである場合は継起関係と解釈するが、その継起関係は、ほぼ同時である。よって、「トドウジニ」には、前件と後件が同時に捉えられる事態であることを表すことができる。

だが、「トドウジニ」と同じく複合接続助詞であり、しかも時間従属節として用いられる形式には、たとえば「ガハヤイカ」「ヤ（イナヤ）」がある。これらの形式を考察することにより、複合接続助詞で表す時間従属節の役目や意味を説明することができる。それについては、今後の課題とする。

参考文献

I. 著書・論文

1. 影山太郎、『文法と語形成』、ひつじ書房、1993。
2. 工藤真由美、『アスペクト・テンス体系とテクスト — 現代日本語の時間の表現 —』、ひつじ書房、1995。
3. 久野 暉、『日本文法研究』、大修館書店、1973。
4. 寺村秀夫、「連体修飾のシンタクスと意味—その 2—」、『日本語・日本文化』第 5 号、大阪外国語大学留学生別科、1977。
5. 寺村秀夫、「連体—修飾のシンタクスと意味—その 4—」、『日本語・日本文化』第 7 号、大阪外国語大学留学生別科、1978。
6. 寺村秀夫、『寺村秀夫論文集 I 日本語文法編』、くろしお出版、1993。
7. 仁田義雄、『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房、1991。
8. 三上章、『文法小論集』、くろしお出版、1970。
9. 南不二男、『現代日本語の構造』、大修館書店、1974。
10. 南不二男、『現代日本語文法の輪郭』、大修館書店、1993。
11. 森田良行、『基礎日本語辞典』、角川書店、1984。

II. 辞書

1. グループ・ジャマシイ、『日本語文型辞典』、くろしお出版、1998。
2. 小学館国語辞典編集部、『日本国語大辞典』第二版、小学館、2001。
3. 北京・商務印書館、小学館編集『日中辞典』、小学館、2001。

III. 使用テキスト（出典のないものはネイティブによる作例であ

り、アドレスで書かれたものはインターネットで調べたホームページのアドレスである)

1. 青＝宮本輝、『青が散る』（文春文庫）、文藝春秋、1985。
2. 五十六＝阿川弘之、『山本五十六』（CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊）、新潮社、1995。
3. 国盗り＝司馬遼太郎、『国盗り物語』（CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊）、新潮社、1995。
4. 孤高＝新田次郎、『孤高の人』（CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊）、新潮社、1995。
5. 塩狩峠＝三浦綾子、『塩狩峠』（CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊）、新潮社、1995。
6. 新橋＝椎名誠、『新橋烏森口青春篇』（CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊）、新潮社、1995。
7. 砂の女＝安部公房、『砂の女』（CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊）、新潮社 8、1995。
8. 戦艦＝吉村昭、『戦艦武蔵』（CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊）、新潮社、1995。
9. 虹に＝赤川次郎、『虹に向かって走れ』（角川文庫）、角川書店、1990。
10. 花埋み＝渡辺淳一、『花埋み』（CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊）、新潮社、1995。
11. 華岡＝有吉佐和子、『華岡青洲の妻』（CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊）、新潮社、1995。